

「自分の五感で感じることの大切さ」

3-A 宇都宮大学 相原 光

2024年9月3日から9日の6日間、上海、四川、北京の三都市を訪問させていただきました。その中で自分の中であった変化、日中関係が今後どうあるべきか、そしてこの訪中が自分にどのような影響を与えたのかについて述べていきたいと思います。

訪中前の中国の印象は、正直なところあまりいいものではありませんでした。今までの見てきたメディアの中では、政治に関するニュースが多く取り上げられていたため、中国は閉鎖的な国であり、国民も縛られながら生活していると勝手に想像していました。また、そのような日本における典型的な中国のイメージによって、両親や祖父母にも中国に行くことに関して少し心配されていたことから、余計にそのようなイメージが自分の中で膨らんでいってしまいました。しかし、訪中前にはそのような悪いイメージだけではなかったのも事実です。それは、アジア諸国に多大な影響を今も昔も与えている歴史的にも文化的にも豊かな国であるということです。これに関しては、高校の世界史の授業や、大学での講義の中で、そのように感じた節が大きいと考えます。

では、今回訪中してみてどのように変化したのかについて述べていきたいと思います。中国の大学生や、バスガイドさんなどとの人との交流を通して、「国民も縛られながら生活している」という閉鎖的なイメージが180度変化しました。それは、出会った中国人の方々はみな、私たち日本人と何ら変わらない自由な日常を送っているということです。また、そのイメージに付随して、上海などの先進的な都市を訪問したときに目にした、様々な先進的な技術や建築物から、中国は経済面において世界的に大きな国であるというイメージが訪問前よりも強くなりました。加えて、故宮、三星堆博物館、万里の長城などの歴史的価値のある遺跡を見学して、中国の歴史・文化は、自分が思っていたよりも壮大で、歴史的に深みのあるものである、つまりは「歴史的にも文化的にも豊かな国」のイメージがさらに強くなりました。

そして、今回の訪中によって考えた隣国隣人として今後どのように中国という国・中国の方々と接していくべきかについては、結論から言うと、政治的に目指すものが違うことを互いに干渉することなく、尊重し合い、歴史的に積み上げられてきた中国と日本の人間関係を維持し、成長させていくことで強固な協力関係を築き、そこから経済的な協力関係を構築させていくべきだと考えます。これまでの歴史を見ても、一番根底の部分を支えてきたのは人のつながりであることは明白な事実です。それを継続するだけでなく、日中の平和的な友好関係を強固にするためにも、このような訪中事業はとても有意義なものであると考えます。最後に、この約一週間の訪中は自分に大きな学びをもたらしてくれました。それは、自分がイメージするものと現物には相違が必ず存在し、その相違がどのように乖離しているかは自分の五感で感じ、それをもとに考えることが大切であるといういわば、「百聞は一見に如かず」ということの大切さです。この学びから、さらにいろいろなところに行って自分でさ

まざまなことを感じ考えたいという思いがさらに強くなりました。また、日中・日日交流を通して、自分の将来を真剣に考え行動している人たちと身近に行動したことで、自分の将来のことをもっと真剣に考えていこうと思えるいい契機になりました。

このような学びを得られたのは、今回の訪中に携わってくださったすべての日本、中国の方のお陰です。本当にありがとうございました。この恩は、自分たちが持つ未来を今よりいいものにしていくことで返していきたいと思います。

「日中友好大学生訪中団での歩み」

3-A 麗澤大学 荒井航平

【はじめに】

まず、今回このような貴重な機会を作っていただいた、日本中国友好協会をはじめとするご
人力していただいた方々に感謝申し上げます。

今回の訪中を通して 1 人で渡航しても人数制限等で訪問出来ない場所にも行かせていただ
き、日中友好大学生訪中団の団員として参加出来て本当に良かったです。

今回、私が参加してよかったと思えた理由を大きく 3 つに分けて記載していこうと思いま
す。

【日中友好大学生訪中団に参加した経緯】

私が日中友好大学生訪中団に参加した理由は主に二つあります。

まず、将来的に日本と海外の懸け橋になる存在になりたいと考えているためです。

次に、現在都立高校で授業を行っている探求事業で高校生に小さなアクションから国を超
えた交流事業に参加出来ることの希望を与えたいためです。私が活動的になったのも大学 1
年生の時に、幼稚園生 10 名に対してイベントを開催したことがきっかけでした。この小さ
いアクションから日中友好大学生訪中団での交流事業に参加して活動することにより、高
校生のロールモデルのような存在になり、高校生自身が自ら意欲的に活動するきっかけを
作っていきたいという思いから参加を志望しました。

【① 中国の魅力を知ることが出来る】

私は、中国の渡航以前までは正直良い印象を持っていませんでした。なぜなら、SNS やニ
ュースの悪い部分を切り取った映像が多く取り上げられていたからです。私は渡航して実
際に自分の目で見たことで多くの魅力に気づかされました。

例えば、上海の夜の街並みはビルやタワー全体がライトアップされ、日本にはない素晴らし
い景色でした。特にクルーズ船から見る上海の景色には衝撃を受け、今でも鮮明に覚えてい
ます。

また、中国の料理も魅力の一つだと言えます。特徴的なのが、昼・夜とコースで食事が用意
されていることでした。上海・四川省・北京とそれぞれ特徴的なメニューが多くその地域に
特徴に合った料理が出てくることが魅力だと思いました。私は特に四川省の中国料理が好
みで、内陸部に位置していることもあり肉料理が多く日本人でも食べやすい料理が多いで
す。一緒の班のメンバーも四川の料理は特に日本人の口に合っているとっていました。

このように、中国で行ったからこそ気づけたことでまだ行ったことがない人はぜひ一度渡
航してほしいと思います。間違いなく、価値観が変わります。

【② 北京で起業している方とのお話】

私は、将来海外で起業も視野に考えており起業家シェアハウスに住みながら日々経営について学んでいます。

そんな中、北京で起業した日本人の方とお話する機会を頂きました。この日本人の方のエピソードは特に面白く、苦勞しながらも楽しみながら活動している姿が私にとってとても印象的でした。起業家の方のお話を聞いて、「運も自分の行動・発信次第」ということや、「失敗覚悟で若いうちにたくさん行動する重要性」など多くの気づきがありました。

最終的に連絡先も交換させていただき、自分をもっと成長して今後一緒に仕事ができる存在まで強くなりたいです。

そのためにも私は、まだまだ語学力・行動量・経営知識等足りないので毎日を無駄にせず、日々精進していきたいです。

【③ 一緒に参加する青年団との出会い】

この訪中団に参加するメンバーは何か挑戦する熱い思いを持った人や、これまでにたくさん活動している人が多い印象があります。バスの移動中では、同じ班員のメンバーと現在活動していることや、将来について語りました。さらに、帰りの飛行機では初めて話す訪中団のメンバーがたまたま隣になったのですが3時間ずっとお互いの活動や、将来の展望などについて話していました。

このように、お互いの活動をリスペクトして現在考えていることを自由にシェアできるこの環境というのは私にとってとても心地良く、刺激をもらえる環境でした。

【最後に】

私は、この日中友好大学生訪中団に参加出来たこと心の底から良かったと思います。

多くの出会い、多くの中国の魅力、多くの価値観が変わる経験ができるのがこの訪中団だと思います。帰国後もこの経験を糧に、今後も日中の繋がりに関して積極的に関わっていきたいです。

「自分自身で現地に行く重要性」

3-A 聖隷クリストファー大学 江崎 愛

今回私は、日中友好大学生訪中団の一員として中国の上海、成都、北京の3都市を訪問した。

今の日本のお金や漢字には中国の影響が色濃く残っている。それがどのようにして起きたのか、何かしらの意図があるのかが気になった。そして、インターネットやテレビなどの情報だけではなく、自分の目で見て、耳で聞いて、体で感じることで、より正確な情報を得たいと強く思うようになった。中国という国は膨大で、多様な文化や風習が存在する。その中で、実際に自分自身が足を運んで体験することが必要だと感じた。

最初に訪れた中国の都市、上海では、クルーズ船でライトアップされたビルを眺めているのはまるで夢の世界に迷い込んだような気分になった。煌びやかな夜景を眺めながら、中国の文化や歴史に思いを馳せることができ、とても感動した。2つ目に訪れた成都では、パンダたちに会うことができるパンダ繁殖基地を訪れた。パンダのぬいぐるみや映像だけでなく、実際に生きたパンダたちに会えるということは、本当に貴重な体験となった。また、成華大学の学生と交流する機会もあり、違う国の同じ学年の学生とお互いの国や文化についてたくさんのことを学ぶことができた。3つ目に訪問した北京では、万里の長城や故宮などの歴史的な遺跡を訪れることができた。長城の壮大さや歴史の重みを感じながら歩くことは、言葉では表現しきれない感動を与えてくれた。故宮では、中国の皇室の歴史や文化を垣間見ることができ、非常に興味深い体験となった。これらの体験を通じて、現地の人々と触れ合い、お互いを理解することの大切さを痛感した。また、3つの都市を訪れたことにより、同じ中国でも都市によつての食事や街並みの違いなどを自分自身で理解することができ、非常に貴重な経験となった。

インターネットなどの印象操作により悪いイメージを持たれやすい中国だが、実際に訪問してみると街並みは綺麗で、親切で温厚な人が多い。

ネット上の情報だけでは伝わらないリアルな魅力がたくさんある国であり、その魅力を知るためには自らが足を運んで体験するしかないと感じた。第三者の意見だけで判断することは危険だと痛感した。だからこそ、自らの体験を大切に、客観的に情報を収集することが重要だと感じた。

今後も友好な関係を築くためには、自分自身がお互いを尊重し、理解し合うことが欠かせない。今後もこの経験を活かし、日中の架け橋となるよう努力していきたいと感じた。

これからも日中交流を大切に、国際社会での貢献に努めていきたい。

今回中国を訪問する最初の頃は、ほぼ初めましてのメンバーと一緒に7日間共にするのはワクワクがあった反面、少し不安に思うこともありました。

しかし、班員に限らず、今回参加して下さった皆様が優しく声を掛けてくれたり、何度

か助けてくれたりしたお陰で不安だった気持ちは吹っ飛びました。

移動中、中国の景色をみながら友達と一緒に小声で歌った中国の歌。テーブルを囲ってみんなで談笑しながら食べた食事。パフォーマンスの披露をする為、自分達の原稿を何度も練習し、確認し合った日々。何気ない時でも私にとっては1つ1つ忘れられない思い出となりました。

今回の旅で私自身が5感を使って得た情報は山の数ほどあります。普通の旅行では経験できないようなことや、訪問することが出来ないような場所にも訪れることができました。また、何不自由なく過ごせたその裏には、招待して下さった中日友好協会の方々、私たちをサポートして下さった日中友好協会の方々、現地のバスガイドの方やバスの運転手、その他中国、日本の方々の努力があったからだと思っています。

短い間ではありましたが、多くの貴重な経験ができ、新たな最高の仲間達と出会い、人生が変わった、この機会に参加できたことを非常に光栄に思います。ありがとうございました。

「中国を歩く」

3A 神田外語大学 大井愛華

はじめに、この度訪中団として中国を訪問させていただき、これまでの人生で最も印象深い1週間を過ごすことができました。毎日が刺激的で、学びになる経験ばかりでありました。このようなかけがえのない経験をさせていただくにあたって関わってくださった、全ての関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。あくまでもこの度の訪中団は日本の青年を代表して訪問させていただいたので、観光ではないという点においては十分に承知してはいましたが、そもそも観光とは「他の地域や国を訪れ、自然の風景や食べ物、歴史や文化に触れる」ことを目的としているため、そのような意味では定義上観光を十分にさせていただいたとも捉えられるが故に、このような機会を頂戴できたことを大変有り難く思います。そして中でも印象に残っているものは成都ジャイアントパンダ繁殖研究基地見学と、万里の長城見学でした。これらの思い出を振り返りながら、以下のように記させていただきます。

私は生まれてから一度もパンダを実際に見たことが無かったため今回の成都ジャイアントパンダ繁殖研究基地見学は私にとってとても特別なものでありました。一頭一頭が動いている様子はどの瞬間もとても愛おしく、琴線に触れるものでありました。そして、そのパンダを私達と同じように我が子を見守るような表情で観察する中国人の様子を拝見し、パンダが中国において人民に広く愛されていることも同時に強く実感しました。次パンダを見ることができるようになるか分かりませんが、また是非とも成都を訪れてより豊富な種類のパンダを拝見したいと思いました。

また、万里の長城についてもかねてよりテレビや教科書でしか見たことがなかったため、バスの中から存在を自分の目で見て確認できた時は心から感動して胸がいっぱいになりました。実際に一段一段登ってみると、かつての明代の人々の努力を感じるとともに当時の限られた技術のなかでこんなにも圧倒的な長さを誇る城壁を建築、修復、そして維持できたことに強く感銘を受けました。私事ではございますが、両親が「死ぬまでに一度は行ってみたい」と言っていた万里の長城にまさか私が先に登ることができるとは思ってもいなかったため、現地で撮影した景色を送った時に、とても喜んでくれて、まるで私が連れて行ってあげることができたような気持ちになり、込み上げるものがありました。

加えて、実際に現地の中国人と交流すると日本人とは異なり、他人であるにも関わらず家族のように暖かく接してくれるその国民性に強く心を打たれました。私は以前何度か中国に訪問した経験がありますが、どちらかといえば田舎の地域であるため、田舎であるが故のコミュニティにおける親密さなのかと思っておりましたが、上海、成都、北京という主要な三都市どこを訪問しても人々が暖かく交流して下さって、暖かな国民性に触れることができるとも貴重な経験となりました。日本人の中には中国人に対してあまり良くないイメージを持っている人も一定数いるとは思われますが、今回私達が現地の人たちと触れ合っ

て感じたことを後世に伝えることができ、かつ浸透して日中の友好に貢献することができ

れば、これ以上嬉しいことはありません。

この度拝見した博物館や万里の長城はもちろん、上海タワーや SF 博物館などの近未来な建物も訪問したことで改めて中国の悠久の歴史がどれだけの賜物を生み出したかを身をもって実感することができました。

この度体験させていただいたこの上なく貴重な経験に心から感謝し、今後の就職活動を含めた自分の人生に大きく活かしていくことを約束し、筆を置きたいと思います。

「自分で体感したから得ることができたもの」

3-A 神戸市外国語大学 岡崎心花

私は今回の訪中団で初めて中国を訪れました。中国に行く前から自分自身は中国に対して悪い印象を持っているわけではなかったのですが、テレビやインターネットによる偏った情報や、家族から事前に聞いた中国の情報によって、中国へ行くことに対する不安は多少ありました。しかし、大学で中国語を専攻しており、中国の文化についても学んでいる私は、不安よりも中国を訪れることに対する期待の方が何倍も大きく、実際に中国に1週間行ったことで想像以上の貴重な経験をすることが出来ました。まず上海では、全ての建物が東京タワー並に高いことに驚かされました。私は山が多い田舎に住んでいるので、東京の街並みでさえ圧倒されるのですが、東京を超える中国の大都会を前にした時、同じ地球でもこんな場所があるのかと感動しました。夜にクルーズ船から見た上海の夜景は間違いなく今まで見た夜景の中で1番綺麗でした。そしてパンダに会える事を楽しみに向かった四川では、西華大学の学生さんと交流し、うちわに綺麗な柄をつけるという体験ができました。トイレの場所を尋ねると、口頭で教えてくれるだけでなく、トイレがある場所まで付いてきて教えてくれたり、僅かながら話せる中国語を披露すると「すごい」と沢山褒めてくれたりなど、中国のおもてなしの文化をすごく感じる事ができ、中国人の温かさに触れました。最後に訪れた中国の首都、北京では万里の長城や故宮博物院など、テレビや教科書で目にするような、まさに中国の歴史を感じられる遺産や建造物を目の前にし、感動しました。万里の長城では時間が無く、あまり登ることは出来なかったのですが、またいつか訪れて全て登りきりたいという目標も生まれました。他にも麓でアイスを食べたりお土産を見たりなどして十分に楽しむことができました。

また食事に関して、中国の食事と聞くと思い浮かぶ、あの回る円卓を実際にみんなで囲み、食べきれない程の沢山の料理を振舞っていただきました。本場の中華料理を毎食すごく楽しみにし、3つの都市で出される料理の特徴をそれぞれに感じながら、美味しく頂きました。その中でも、四川で光に包まれた綺麗な景色のなかでパフォーマンスを見ながら火鍋を食べた事が特に記憶に残っており、異空間にいるような非日常的な体験をすることが出来ました。

今回の訪中を終えて現地の中国人の温かさに触れることが出来たのはもちろん、同じ班の方とも仲良くなれて、日々交流も出来ました。むしろ私の中では事前研修では初対面だった人と、いきなり1週間の行動を共にし、長いと思っていた1週間があっという間に終わり、最後は別れたくないと思えるほど仲を深めることが出来たという経験が1番思い出に残っています。

これからも訪中団で出会った仲間の縁を大切に、中国と積極的に関わっていきたくと思います。また私は中国語の上達の為、中国に留学したいと考えているのですが、今回の訪中団で得ることができた中国についての知識は一部分に過ぎないと思うので、中国語のみ

ならず、今回見えなかった中国の新しい部分を見つけていきたいという新たな留学の目標も出来ました。最後に、この訪中団に関わり貴重な体験をさせて下さった皆さん、本当にありがとうございました。

「中国の歴史と人の温かさ」

3-A 常葉大学 片瀬柚花

日中友好大学生訪中団として中国を訪問できたことは、大変幸運であったと感じています。この訪中の機会を通じて、多くの学びと気づきを得ることができました。現地でお世話になった方々、随行員の皆様、そしてこの素晴らしい経験を共有した仲間たちに、心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。

今回の訪中は、上海から始まり、成都、北京へと進む中で、ただの観光旅行では味わえない貴重な経験をさせていただきました。現地の学生たちとの交流を通じて感じた友情や、世界遺産である万里の長城や故宮博物院で味わった歴史への感動は、私の心に深く刻まれています。教科書で学ぶだけではわからない、実際に見て、触れて、体験することで得られる感動と学びに満ち溢れ、中国の歴史と文化の深さを肌で感じる事ができた一週間でした。

今回、万里の長城や故宮博物院など、数々の世界遺産や歴史的な名所を訪れる機会に恵まれました。その中でも、特に心に残っているのは上海博物館です。中国の長い歴史と豊かな文化が一つの場所に凝縮されているようで、まるで時間を超えた旅をしているかのような気持ちになりました。その中でも最も印象的だったのは、千年以上前に作られた千佛石碑です。無数の小さな仏像が並ぶ様子は圧倒的な存在感を放ち、まるで歴史そのものが目の前に広がっているようでした。その緻密な彫刻技術だけでなく、仏像に込められた人々の信仰心や願いの強さも感じ取ることができました。一つ一つの仏像が微細に彫られている様子を見て、中国古代彫刻の技術の高さを改めて実感しました。何百年も続く信仰の力や歴史の重みを目の当たりにすることで、自分の視野が広がり、より大きな視点で物事を見つめることの大切さに気づかされました。歴史や文化を学ぶことの楽しさだけでなく、人類が長い年月をかけて培ってきた信仰や価値観についても深く考える機会を与えてくれた、非常に貴重な体験でした。

また、訪中前から楽しみにしていた現地の大学生との交流も大変素晴らしいものでした。中国の人々との交流を通じて、訪中前に私が抱いていた中国の印象は大きく変わりました。他国の人々に対して偏見を持つことは容易である一方で、その偏見を実際に体験を通じて払拭することの重要性を実感しました。私が抱いていたネガティブなイメージは限られた情報に基づくものであり、実際の中国の人々はとても温かく、礼儀正しく、日本に対する興味や好意も感じられました。彼らの温かいおもてなしや親しみやすい人柄のおかげで、交流がさらに楽しいものとなりました。

訪中団として過ごした一週間は、単なる観光や学びの場にとどまらず、将来の自分に何ができるのかを考える大きな機会となりました。この経験を通じて、私は自分自身の成長を実感すると同時に、今後の目標として、日本に来る中国人の手助けとなるような仕事に就きたいと強く思いました。この夢を実現するために、今後も言語スキルの向上や異文化理解の深化に努め、日々精進していきたいと思います。そして、両国の理解と友好の架け橋として、よ

り良い未来を築いていけるよう尽力していきたいと思ひます。
改めて、私たちを温かく歓迎してくださり、素晴らしいおもてなしをいただいたことに、深く感謝申し上げます。

「中国体験記」

3-A 明海大学 勝股由妃

訪中をしようと思ったきっかけは大学で中国語や歴史、哲学を学んでいたのも歴史といった分野に興味がありました。今回故宮や学生交流などといった学んだことをさらに理解、身に着けることができると考え参加いたしました。

～上海～

上海センタービル、黄浦江クルーズ船、上海博物館に見学させていただきました。

上海センタービル

中国で一番高いビルということで上海霧の街並みを見渡すことができ、日本のスカイツリーよりも高さは低いに登れる展望台は高いというビルに行きました。上空は雲、霧がかってしまい見えにくくなっていましたが、時々薄くなっているところから住宅街や夜にクルーズを予定していた川を見ることができ、とても楽しかったです。

黄浦江クルーズ船

団体貸し切り船で上海の夜景を楽しむことができ、川を挟んだ左右のビル群にプロジェクションマッピングが施され何度往復しても飽きが来ない素晴らしい夜景の連続でした。

上海博物館

青銅器や陶磁器、彫刻の歴史や特徴が歴代で並べられており、転換期や継承されてきた説明をゆっくりではありますが理解できてよかったです。

～成都～

成都パンダ繁育研究基地、三星堆博物館、三星村考古探索、成都 SF 館、西華大学に見学・体験させていただきました。

成都パンダ繁育研究基地

日本のパンダ施設とは比べられないほど広く、部屋数や飼育されているパンダも多く中国での人気度や愛がとても伝わりました。野生に帰っても生き抜く確率を上げることを現在の目標にしていると聞き、中国のパンダの研究がいかに進んでいるかを知ることができました。

三星堆博物館、三星村考古探索

イヤホンを身につけ展示物の解説をしっかりと聞きながら理解を深めることができました発掘したものを組み立てるのがとても難しく、繊細なものであるということを改めて実感することができました。

成都 SF 館

今回時間の都合上、じっくり見学することができず、今後の楽しみの一つとなりました。

西華大学

現地学生がゲームの進行を日本語で説明してくれ、伝言ゲームを成功させることができました。その後中国の無形文化遺産である漆扇作りを体験させていただきました。細かい指示は日本語での説明が難しく口数が減ってしまいましたが、お互いに動作などで意思疎通を図り、文化と交流といった貴重な経験をすることができました。

～北京～

中国伝統文化体験（京劇体験）

槍を用いた型や発声、細かなしぐさを学び、貴重な体験ができ、次回は京劇を見てみたいと思いました。

中国伝媒大学

日本の学生団が発表をしている際に伝媒大学の学生がとても楽しんでいたのを見てとても良い交流ができたと感じました。

歓迎レセプション

他の訪中団と合同で行われた会食で、両国の学生たちの交流の場という貴重な場に参加することができ、とても光栄でした。その場でつながった縁を大切にしていきたいと感じました。

万里の長城

実際に登り、傾斜のきつさに驚かされました。当時の人はこの位の防壁を立てないといけないくらいの状況下で生きていたという現実を改めて実感することができました。

故宮博物院

入口から出口まで一方通行でしか行けず、建物のつくりや配置を実際に目で見てとても美しいと強く感じました。

同仁堂会社

たくさん組み合わせによって健康を維持することができると知り、実際に試飲した後は体がポカポカし効果を実感することができたと感じました。

羅紅美術館

写真をゆっくり見ることができ、リラックスしながら見学することができました。

～食事面～

ターンテーブルに満杯以上の料理が届き、初めの頃は最後のほうに届いた料理に手を付けることができず、申し訳なかったが次第に慣れてきて、完食までとはいかないがワクワクしながら食事をすることができた。油濃いものが多かったイメージでした。

～ホテル～

事前研修の際に虫問題などで少し心配でしたが、特に心配点はなくしっかり体を休めることができました。

今後

今回の訪中を通してまた来たいと強く思いました。今回時間が足りなくて断念した SF 館や伝統文化体験をもっと多く体験し、話せるようになりたいと強く思いました。大学を卒業するまでに一つでも高い級を取得できるよう尽力したいと思います。

「知らないから批判する」はもう終わり ～百聞不如一见～

3-A 青山学院大学 兼満愛

自分の一番嫌いなところはどこですかという質問に私は間違いなくこう答える。知らない物事に対してすぐに批判的になってしまうところだ。知らないことを知ろうともせずに「世間的にはこう言われているから」「私の友達是这样言っているから」と断片的な情報だけを信じて、勝手に批判していた。就職活動で自分と徹底的に向き合い、初めて気付いた自分の短所だった。今回、どうにかそんな自分を変えたい、断片的な情報に振り回される自分ともうさよならしたい、と思い訪中団に応募した。

日本と中国は、隣国としての長い歴史を持ち、切っても切り離せない関係である。中国は日本の最大の貿易相手国であったり、多くの日本企業が中国に進出していたりしている。また、経済面だけでなく文化やスポーツ交流も行なっている。一方では、戦争を含む歴史的な問題や領土問題に悩まされており、外交関係は良好といえないのが現実である。また、私は政治的問題だけでなく、日本国民の中で「中国っぽい」「中国人っぽい」というイメージが蔓延していると強く感じていた。ニュースやエンタメなどメディアが伝える中国のイメージはいつも「気性が荒い」「模倣品が多い」「ルールを守れない」など圧倒的にマイナスなものが多い。日本人が中国に対してよくないイメージを持つてしまうのも必然的なことなのかもしれない、と思うようになっていた。しかし、もう断片的な情報に振り回されるのはやめて、自分の目で中国を見て、自分に自信を持って「中国はこんな国」と言えるようになろうと決め、渡航した。

まず中国に行って感じたことは「人々の優しさ」である。私は中国語がわからず、買い物時や食事時に何か困ったことがあったらどうしようと不安を感じていた。しかし、私が何か伝えようとするすると翻訳アプリを出してくれ、疑問が解消するまでとことん助けてくれた。しかも、一週間の滞在でそうしてくれた人は一人ではなく、数えきれないほど何人もいたのだ。お土産屋さんで欲しいお菓子を探していると、翻訳アプリを使って私の目当ての商品を探してくれた。ホテルでルームキーを再発行して欲しい時も、迷わず翻訳アプリを出してくださり、快適に過ごすことができた。また、大学交流でも、難しいと思っていた意思疎通も翻訳アプリを使ってスムーズに行うことができた。それだけでなく、レストランでのサーバーさんや運転手さん、ガイドさんなど、日本に対していいイメージを持っていないかもしれない、という私の不安を一瞬で吹き飛ばしてくれるほどの良いサービスを提供してくださった。

そして中国に行って衝撃を受けたことは「圧倒的 IT 大国」だということだ。私は現金を持たず中国に渡航したのだが、バーコード決済とカードだけで生活できるのだということに衝撃を受けた。日本でもバーコード決済や電子マネーは普及しているが、現金しか使えない店はまだ多く見かけられる。しかし、中国ではモバイル決済の普及率が 86%と世界一で、スマホ一つで生活できるようになっている。また、至るところにあるコンビニでは自分で商

品をスキャンして買い物ができる自動レジが主流であった。日本ではまだレジに並んで店員さんにスキャンしてもらうのが主流であるため、中国のコンビニの未来化には驚いた。今回中国に渡航して、人の親切さ、革新的な技術、美味しい食事に触れ、私の中国に対するイメージは 180 度変化した。自分の目で見て感じるからこそ他者に振り回されることなく自分の強い考えを持つことができるのだと知った。これからも自分で見たもの感じたものを大切にして生活したい。

最後にこの渡航に関わってくださりサポートしてくださった日中友好協会の皆様、中日友好協会の皆様、ガイドさんや運転手さん、全ての方に感謝いたします。安全に楽しく渡航ができたのはみなさまのおかげです。ここで得た学びを必ず日中友好への活動、将来の自分へと活かします。ありがとうございました。

「日中友好への思い」

3-A 上智大学 京極青葉

「中国」。この言葉を聞いたとき、あなたはどのような印象を即座に思い浮かべるだろうか。私は幼い頃に中国・北京に三年半ほど住んでいたことや、高校での第二外国語としての中国語の授業を通して、中国の文化や歴史、政治や言語など中国そのものに対して関心を持ち続けてきた。そのような中で次第に感じるようになったのは、私がもっていた中国人に対するイメージと、周りの人の中国人に対するネガティブなイメージとのずれである。このような私たち自身が抱く、国や人物、出来事に対するイメージ形成に大きな影響を与えるメディアによる報道では、事実であるとしても切り取られた一部分しか知ることはできない。よって今回、自分で実際に足を運ぶことで、中国の今の姿を体感したいと考え、訪中団への参加を希望した。

まず今回の訪中を通じ最も強く感じたのは、「巨大な中国」である。それはただ単に、主要な道路がどこへ行っても日本の倍ほど広がったり、そびえ立つ高層ビル群に目を見張るといったような、目に見える大きさにとどまるわけではなかった。それよりもむしろ、中国の人々もつ器の広さや、深い思いやりの心に滞在中何度も気づかされ、驚きを隠せなかったのである。例えば食事の際に火鍋などの初めて食べる料理の食べ方が分からず困惑していると、従業員の方が「我来吧(私がやるよ)」とすぐにやって来て食べ方をレクチャーしてくださったり、見学中ガイドの方に質問すると、分かるまで何度でも丁寧に説明してくださった。また火鍋レストランに限らず、今回ご招待いただいたレストランでは、どこでも余りが出て申し訳なく思うぐらいの量と数の食事を用意していただき、食文化を通じ中国の寛大さを感じたのである。

さらに今回上海、成都、北京と三つの大都市を訪問した中で確かに見受けられたのは、中国の悠久の歴史と、同時に発展した中国社会であった。万里の長城では、敵が簡単に上ってこられないようにばらつきのある段差を意図的に用いたという階段を、時折息切れしながら登った。何世紀にもわたるこの歴史的建造物を、いったい何万人の人が築き上げ、そしてその上を今日までにどれくらいの人々が踏みしめてきたのかと思うと、畏敬の念を感じずにはいられなかった。そして万里の長城においても、そのあとに訪れた故宮においても、それらが何百年、何千年とその場所にあり、保護されてきたという事実にも何度も考えさせられた。

このような悠久の歴史を感じるとともに、反対に中国の発展した社会像も強く印象に残った。初めに訪れた上海では、黄浦江クルーズ船の上から見える高層ビルやネオンの煌びやかな様子を目を奪われた。また渡航前から中国はキャッシュレス社会であると頭に入れていたが、万里の長城を登る途中にある売店においても QR コード決済だと分かったときはさすがに驚いた。中国社会の急速な発展と、それに果たして14億人もの人々がついていけているのかと何度も疑問に思った。

まとめに、今回の大学生訪中国を通して私の中で再確信できたことが一つある。それは、大きなまとまりとしての「国」と、その中の一人ひとりの「個人」とは切り離して考えるべきだということだ。2024年現在、尖閣諸島における課題や、処理水放出の問題など、日中関係は決して良好であるとは言えないだろう。しかしこのような状況において、中国の人々を「中国人」と一括りにし、ネガティブなイメージをもって敵対視するのだとすれば、それは大変「もったいない」とも言えることなのだと思う。今回訪れた西華大学、伝媒大学でそれぞれ出会った学生たちは皆、私たちが盛大に歓迎してくれ、おかげでお互いすぐに打ち解けることができた。好きな音楽や見ているドラマなど、共通の趣味や好みを見つけることもでき、国を超えた友情を築き上げられることにより大きな喜びを感じた。国家間が緊張する中で今私たちに求められているのは、摩擦の原因となる問題について知りつつ、互いの国の「個人」にも思いを寄せることなのではないだろうか。長年にわたる日中友好の歴史をより深いものにし、今後もさらなる交流を続けていきたい。そのために、私自身精一杯努力しようと強く思えた今回の訪中であった。

「近くて遠い国」

3-A 茨城大学 佐野 将司

私は海外、特に歴史的に関係が深い東アジアの国々に興味があります。しかし、世間の中国に対する風当たりが強く、マスメディアは大気汚染や経済低迷等中国国内のネガティブな情報や、日本の土地を買いあさっている、反日デモが起きているなど分断を煽るような情報を報道し、受け手側もそれに同調するような反応を見せています。私は中国に対するネガティブなイメージが少なく、悪い国では無いことを自信をもって発信したいのですが、私自身も中国の情報は日本に興味のある留学生が優しく、マナーも良い事くらいしか分かっておらず、それは中国人全般というより、日本にいる中国人留学生という偏った一部の情報に過ぎないので実際に渡航して、地理的には近いが、正確な情報を得ることが難しい中国国内の様子をしっかりと吸収して日本に持ち帰ることを目標にして今回の訪中団に臨みました。

7日間の訪中は上海から始まりました。上海と言えば14億人の人口を抱える中国の経済の中心であり、想像していた通りの大都市が広がっていました。大都市であるのと同時に渡航前は大気汚染も酷い都市なのだと思像していましたが、予想に反して空は透き通っており、クルーズ中も大気に関する不満を全く持たずに上海の夜景を楽しむことができました。訪中期間中、日本では多く見かけるトラックをあまり見かけなかったり、環境に良いとされるトロリーバスやレンタサイクル、電気自動車が多く走っていたりと、目につくだけでもこれだけの環境政策が実施されていましたが、そのような努力の結果なのだと考えました。

2日目は上海を離れ、四川省の成都に向かい、2泊3日を過ごしました。この3日間は多くの現地の人々と関わることになり、一部の日本人の間で言われている中国人は民度が悪いという偏見に自信を持って間違っていると見えるようになりました。まずは上海から成都へ向かう飛行機の中で離陸前にCAさんが外国人である私たちにフレンドリーに英語で会話してくれて楽しい時間を過ごすことができました。更にフライト中、鼻血が出てしまいましたが、英語でオーマイガーと驚いた後迅速にティッシュを取ってくださり、それだけでも十分なのに鼻血が止まった後もウェットティッシュと温めたおしぼりを渡してくれました。レストランではレンゲをスープの中に落として汚してしまい、拭いてそのまま使おうと考えていたら店員がわざわざ新しい物を用意してくれました。大学訪問では、現地の学生と楽しく交流し、交換したSNSでも楽しかった。楽しい旅にしてねといったメッセージを送ってくれました。他にも火鍋屋では火の通し方を丁寧に教えてくれたり、空港のお土産屋では翻訳アプリを使って丁寧な接客をしてくれたり、出会う人全員おもてなしの心を持った良い人でした。

4日目から最終日までの3泊4日は首都である北京で過ごしました。今まであまり見なかった外国人も万里の長城や故宮博物院には多くいました。これら2つの観光地は北京を代表するものであり、万里の長城は昔の人が作った壮大な建築物に圧倒され、故宮博物

院では、中国の長い歴史を感じる事ができました。ただ、どちらも見学時間が短く、万里の長城は頂上まで登れなかったですし、故宮博物院の天安門を見学することができなかったのが少し残念でした。もう一度北京に赴き、できなかったことを楽しみたいです。

もちろん今回の7日間の訪中で本当の中国を完全に体験して理解したわけではないですが、少なくとも日本のマスメディアや SNS で見かけるネガティブな発信は 14 億人いる中国国内の一部を悪意を持って流しているだけであることを理解しました。中国政府が日本人大学生の代表として招いていただいたことに感謝し、中国の真実を周りの人に発信して日中友好の一翼を担いたいです。また、上海、成都、北京のそれぞれが異なる魅力を見せてくれ、中国への理解が深まりました。しかし、これはまだほんの一部に過ぎません。特に上海のクルーズでは派手に光り輝く中国の中心の街並みに圧倒されました。次は、ハイテク産業が盛んな深圳や、自然が多く、多様な民族が暮らす東北部なども訪れ、さらに中国を深く理解したいです。

「中国に対する認識の変化」

3-A 愛知大学 萩木場菜七

今回の7日間の中国訪問を終えて、中国に対する印象が大きく変化した。正直に言うと、訪中する前までは、政治問題や複雑な日中関係といった中国に対して良い印象を抱いていなかった。しかし帰国した今、中国についてもっと深く知りたい、日本の多くの人々に中国の良さについて知ってもらいたいと思うようになった。

私が訪中団参加を決めた理由は二つある。一つ目は、中国に対する理解不足を感じていたからだ。大学で中国語を専攻しており、中国語に関しては熱心に勉強してきたが、中国自体の知識がほとんどなかった。自分自身が実際に現地へ行き、中国の方と交流し、文化や生活習慣を味わうことで、語学だけでなく、中国自体への理解を深めたいと思ったからだ。二つ目は、自身の今後につなげたいと考えたからだ。私は将来、中国語を用いて仕事を行いたいと考えている。この経験で得た知見をこれから先に活かしたいという思いから、訪中団への参加を決意した。

実際に中国を訪れてみて、規模の大きさに非常に驚いた。空港や博物館などの建物、道路、人の数、目に見えるものすべてにおいて、日本との規模感が大きく異なった。また、数えきれないほどの高層ビルや電子決済サービスの普及から、中国経済の発展がものすごく速いスピードで進んでいることが目に見えてわかった。中国経済の目まぐるしい発展について、ニュースで聞いたことはあるものの、この状況を自身の目で見て、中国は世界のトップを走っていると改めて実感させられた。また、この規模の大きさと発展のスピード感から、今後も中国は変わらず先進的に発展していくと感じた。

私の勝手な偏見で、中国の方は自己主張が強く、そして他人に対して冷たいイメージがあった。しかし、中国人の大学生との交流や街中で出会った方との会話を通して、そのイメージが一転した。とても優しく、情が厚い方ばかりであった。中国人大学生の方は、こちら側が理解できるまで何度も説明してくれた。また、お店の店員さんは尋ねたことに対して、お節介なくらい丁寧に接客してくれた。当初抱いていた中国の方に対する印象と対照的であり、人の優しさ、温かさ、思いやる心を感じた。

その他で印象に残っていることは、もてなしの文化だ。中日友好協会の方々をはじめ、西華大学や中国伝媒大学の学生さんたちなど多くの方々が、私たちを温かく迎え入れてくれた。また、食べきれないほどの料理を提供していただき、パンダやトートバッグなどの贈物をいただき、数えきれないほどの手厚い待遇を受けた。これらから相手に対して、気遣いや心遣いを大切にする中国の文化と価値観をひしひしと感じた。

この7日間、私にとって見るもの・触れるもの全てが目新しく、ドキドキ・ワクワクが止まらなかった。二度とない貴重な経験だったと感じている。そしてまた、中国を訪れたいと心から思うほど魅力のある国であった。それだけでなく、日本人が抱く中国に対するイメージを変えていきたい、中国の良さを知ってもらいたいと強く思うようになった。

そのために、私たちができることは何だろうか。

訪中団のように、中国と日本の青年が交流し、互いに理解し合い、交友を深めていくことが両国の関係を良好にする近道になると私は考えた。今回結びついた関係を大切にして、今後の友好的な日中関係に貢献していきたい。

最後になりますが、今回の大学生訪中団に関わってくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。安心・安全かつ快適な7日間を過ごすことができたのは、皆様のおかげです。生涯忘れることのない、かけがえのない経験ができたことを誇りに思います。この経験を今後の学生生活・社会人生活に活かしていきたいです。誠にありがとうございました。

「中国での体験から見えた日中友好の道」

3-A 京都産業大学 平林菜々香

この 7 日間の訪中を通して、私は中国人の温かさに何度も心を打たれました。大学での交流、ホテルやレストランなど、どこへ行っても、中国の方々は「歓迎」や「再见」などの言葉をかけてくださり、歓迎してくれました。こうした親切な対応に触れるたびに、私の心は温かくなり、より積極的に多くの中国人と貴重な交流を持ちたいと思うことができました。中国人大学生との交流やお店でのやり取りでは、言語の壁がありました。伝えたいことがうまく伝わらないこともありましたが、中国人たちは私の拙い中国語を何とか理解しようと努めてくれました。私が相手の中国語を理解できず困っているときには、呆れることなく、伝わるまでジェスチャーを使ったり、簡単な中国語に言い換えたり、伝わるまで努力してくれました。このように、私たち日本人を尊重し、コミュニケーションを続けようとしてくれた愛情深い国民性に触れ、中国のことをもっと知りたくなりました。

しかし、現在の日中関係は友好と言い難い状況にあります。メディアや SNS で流れる情報は、しばしば日中友好関係に悪影響を及ぼす内容が多いと感じます。実際に、中国のマイナスの面を強調する報道が多く、日本人が中国人に対して嫌悪感を持ち、中国人も日本人に対して同様の感情を抱く風潮が見られます。私自身、中国についての知識、理解を深めようと努力してきましたが、メディアや SNS を見れば見るほど中国という国、中国人が危険であると感じるようになってしまいました。また、社会主義の国である中国の価値観や考え方が、日本と大きく異なるため、相容れない存在であると考えようになり、中国留学を諦めたこともありました。

今回の訪中で、日本人を理解し、仲良くしようとしてくれる中国人が多くいることを学びました。また中国が想像以上に発展した国であったことに驚き、自分自身が今まで、ほんの少しの中国の側面しか知らなかったことを痛感しました。私たち日本人は、本当の中国の姿、こんなにもあたたかい国であることをもっと知る必要があると感じました。

一方で、北京を訪れた際には「小日本人」という言葉も耳にしました。これは日本人に対する中国語の蔑称であり、やはり中国の中には日本に対して良いイメージを持っていない人もいることを認識しました。このような言葉を聞いたことで、日中関係の複雑さを改めて実感しました。

今回初めての訪中を通して、中国の良い面だけでなく、日中関係の現実にも触れることができました。日中友好関係を築くためには、まずお互いをよく知り、尊重し合うことが重要です。実際に、多くの中国人と簡単な言葉やあいさつ、笑顔で繋がり、日中友好関係を築くのは難しいことではなく、すぐ目の前にあることを実感できた 7 日間でした。今回の訪中で学んだことを、諦めることなく、より多くの人に伝え続け、日中友好の輪を広げていきたいと考えています。最後に関係者の皆様、このような貴重な機会を提供していただき、本当に感謝しています。ありがとうございました。

「中国での新たな発見と自己成長」

3-A フェリス女学院大学 門出華奈

私が大学に進学したのは、中国の心理学を学びたいという強い思いからでした。週に6コマも授業を受けていましたが、実際には中国についてほとんど何も知らず、関心のある分野の論文を少し読む程度でした。中国の文化や歴史も学校で学んだごく一般的な知識しか持っていませんでした。そんな中、1年間の上海留学が決まったとき、何も知らないまま中国に行っても良いのかと不安を感じていました。ちょうどその時、大学の教授から訪中団への参加を勧められ、迷わず参加を決めました。訪中してまず驚いたのは、中国の人々の温かさと空気でした。中国人が日本に来る際、私たち日本人は時に彼らのマナーに対して良い印象を持っていないこともあります。そのため、中国の文化は日本とは大きく異なると感じていました。しかし、現地で出会った人々は本当に親切で、相手を喜ばせたいという気持ちが伝わってきました。例えば、友人の誕生日には、お店の方が歌を歌って祝ってくれたり、特別にスープを用意してくれるなど、思いやりを感じる瞬間が多々ありました。また、中国の空気にも驚かされました。中国といえばPM2.5というイメージが強く、空気が非常に汚れていると思い込んでいましたが、実際には全くそんなことはなく、清々しさを感じたのです。それまでは、どうしてもメディアや周囲の意見に影響され、中国について一方的な見方やステレオタイプを持っていたことに気がきました。恥ずかしさを覚えると同時に、そのことに気付けた喜びもありました。現地で直接体験した中国の文化や人々との交流を通して、自分の偏った考えが変わり、より多面的な視点で物事を捉えられるようになりました。この経験は、今後の学びやキャリアにも大きな影響を与えていると感じています。中国の心理学を深く学び、将来的には両国の橋渡しをするような役割を担いたいという新たな目標ができました。今回の訪中団で得た知見を活かし、日中間の理解を深める一助となるような活動に取り組んでいきたいです。

訪中中は多くの場所を見学し、とても充実した時間を過ごしましたが、最も心に残ったのは同じ班のメンバーとの交流です。私はこれまで、エスカレーター式の教育を受け、価値観の偏った環境に身を置いていました。大学に入って中国語を学ぶ人はいても、中国そのものに関心を持つ同級生はほとんどいませんでした。しかし、訪中団に参加したメンバーは、皆それぞれ中国に強い関心や理由を持っており、バスの中やホテルで語り合う時間は非常に刺激的で、自分の価値観が広がる貴重な経験となりました。

最後になりますが、このような貴重な機会をいただいた日中友好協会の皆様、関係者の皆様、そして推薦して下さった上原教授や胡先生に、心から感謝申し上げます。

「何かを得るには挑戦を」

3-A 信州大学 柳田亮

私は今回の訪中団で初めて中国を訪れました。訪中前に中国について抱いていた印象を思い返すと、正直あまり良いものではありませんでした。しかし、何を根拠にそのようなイメージを持っていたのかと問われても、明確な答えは出せなかったでしょう。今思えば、知らないうちに何かしらの先入観を持っていたのかもしれませんが。実際に訪れたことがないまま、インターネットやテレビの情報を鵜呑みにし、中国という国を自分の中で勝手に作り上げてしまっていたのです。しかし、今回の訪中によって、私が抱いていた先入観は良い意味で大きく覆されました。この訪中団での一番の学びは、「自分の目で見て、肌で感じることの大切さ」に気づけたことだと思います。ここからは、具体的にどのようなきっかけで先入観が覆されていったのかをまとめたいと思います。

まず1つ目は、中国の経済発展です。1日目に訪れたのは、中国最大の経済中心都市である上海でした。空港を出て都市部に向かう途中で見えてくるビル群に圧倒されました。隙間なくビルが立ち並び、何車線にも及ぶ道路が整備され、バイクや乗用車、自転車が忙しく行き交う姿を目の当たりにして、中国の急速な発展を実感しました。また、黄浦江クルーズ船見学では、昼間とは違う景色が広がり、そびえ立つビル群がライトアップされ、言葉にできないほど幻想的な夜景を目にしました。この瞬間の光景は、これから先もずっと忘れることはないでしょう。このように、一つの都市だけでも日本では感じられないほどの経済発展を目の当たりにし、中国に対する印象が大きく変わりました。中国のGDPはアメリカに次ぐ世界第2位で、日本は第4位となっています。それでも、中国は依然として発展途上国とされていますが、本当にそうなのかと疑いたくなるほど、ここ数年で中国が急激に進化している実態を、自分の目で確認できました。

次に、中国と日本の交流についてです。今回の訪中では、西華大学や中国伝媒大学など、現地の大学生と交流する機会を多くいただきました。正直、私は「日本人が中国に対してマイナスな印象を持っているように、中国人も同様に日本に対してマイナスな印象を持っているのではないか」と不安に感じていました。しかし、現地の学生とレクリエーションや漆うちわづくり体験、訪中団と一緒にいったパフォーマンスなどを通じて、一生懸命日本語で説明しようとしてくれる姿勢や、日本のアニメや日本食について熱心に語る様子を見て、国籍に関係なく「ただの友達だ」と感じました。これこそが、本質的な姿ではないでしょうか。確かに、過去の歴史を振り返ると、簡単に「仲良くしよう」と言える問題ではありませんが、今の中国には、私が出会った学生のように日本に興味を持ち、もっと知ろうと努力している人が少なからず存在しています。ここで私が強調したいのは、確かに反日感情を持つ人がいることは事実ですが、それをもって中国人全体を判断するのは間違いだということです。国が違っても、何も変わらない私たちは「友達」なのです。これ以上でもこれ以下でもなく、ただそれだけのことです。それくらい、国籍に関係なく交流していた時は心から楽しい時間

でした。

このように、中国の学生たちとの交流を通して、私が抱いていた印象は大きく変わりました。やはり、これも自分の目で見て、肌で感じたからこそ得られたものだと思います。ある日本の世論調査では、中国に対して「良くない印象」を持っている人が90%を超えていました。しかし、そのうちの約70%は実際に中国を訪れたことがないという結果も出ています。つまり、中国の実情を知らないままに印象を持っている人が多いのです。訪中前の私も、その一人だったと思います。しかし、実際に中国を訪れたことで、持っていたイメージが180度変わりました。ここまで劇的に変わらなくても、自分で確かめてから考えるということが非常に大切だと強く思いました。この訪中団で「自分の目で見て、肌で感じる」という指標が明確になったことは、これからの人生において大きな一歩になったと思います。この1週間は、私にとってこれからの自分の指標をつくるきっかけとなり、一生忘れられない大きな財産となりました。また、訪中団で出会ったある先輩が話していたように、私も謙虚に、ひたむきに努力し、周りの人々に感謝の気持ちをしっかり伝えられる人間でありたいと思います。

最後に、この訪中団で出会えたすべての方々、特に3-Aの皆さん、そして何よりもこのような貴重な機会を与えてくださった日中友好協会、中国人民対外友好協会の皆様をはじめ、サポートしてくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。

「訪中団を経て」

3-A 藤女子大学 若月萌々香

私は大学で日本の古代文学を専門しているが、日本の古代文学は中国の書籍から多くの影響を受けている。自身の専攻に打ち込む中で中国の文学にも興味を持った。また担当教授から中国で経験したことを聞き、そのうち中国に訪れてみたいという気持ちを抱いていた。しかし中国に対して監視社会や空気の質が悪いなどという良いイメージを自身が持っていなかったこと。江蘇省の日本人学校のバス襲撃事件、また自身の中国語の学力が不十分であるというように、個人での中国訪問というのはさまざまな不安を感じていた。団体の訪問するという今回の訪中団の募集を見かけ、海外を団体行動するという安心感と、中国に興味を持つ仲間と過ごすことで、自分一人では得られないであろう新たな気づきを発見できるのではないかと考え応募した。大学生訪中団として上海、成都、北京の3都市を訪れることが叶った。

バスの中から中国の都市を眺めた中で印象的だったのは高層ビルが多く立ち並んでいることだ。その中に工事中の高層ビル、道路が存在しており、発展中だということも強く感じた。一方で、故宮周辺には昔ながらの集合住宅地が広がっていた。訪中2日目には上海博物館を訪れた。夏時代から清代までの展示物があり、中国の長い歴史について作品を通して学ぶことができた。3日目には四川省にある三星堆博物館を訪れた。いずれの博物館においても説明文を声に出しながら作品を眺めている現地の方が多く、自国の歴史に誇りを持っているのだろうと感じた。バーコード決済の普及など先進的な技術を高め、近代的な社会へと発展する中、歴史を誇りに思い、大切に扱っている様子が見受けられた。

また今回の訪中で人の温かさを知ることができた。日本では笑顔で愛想よく接客するのが常であるが、中国は接客中に関して笑顔でいることはない。話す必要がなければ話さずに接客が終わる。しかし、困っていることがあれば率先的に声をかけてくださるのだ。日本人ということがわかり、中国語が通じなくても翻訳機を使用し、身振り手振りでなんとか伝わるようにと最後まで丁寧に対応していただいた。外国人だから、日本人だからと邪険にされることはなかった。国単位で見れば日中関係は冷え込んでいるだろう。しかし、一般の人からはむき出しにされた反日感情は感じなかった。

中国に対して感じていた不安は杞憂であった。今回の訪中団を通して中国への見方が変わり、新たな気づきを得られた。不安や偏見は誰しもの持ちうるものだろう。しかし、そのままにせず一度自分の目で確認し学ぶということを改めて大切にしたいと思った。さらに随行員の方の経験や、ともに訪中団として過ごした全国から集まった仲間からも学ぶことがあり、貴重な訪中経験であった。ひとまずは中国語学習を継続し、自身で情報を掴めるようになり、一人でも多くの人に中国に興味を持ってもらえるよう、今回体験し得られたことを周りに伝えていきたい。ゆくゆくは日中の友好関係のために貢献できるよう、自分にできることは何かを考え今後は過ごしていきたい。

最後に今回の訪中に際して尽力くださった方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。